

嵐牛 友の会便り

第十七号

2019.11.1発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛俳諧資料館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

書画・骨董といわれる物の実態

伊藤鋼一郎

最近、従兄弟から、叔父母の遺した「書画・骨董」の扱いに困って、どうしたら良いか相談を受けました。どちらも売却しお金にしたいのが本音のようです。戦後からバブル期にかけ大枚をはたき手に入れたもので、売れば買った時の何倍かになると聞いていたのでしよう。しかし、ほとんどのものに値が付かないのが現状です。壺の類、茶道具が中心ですが、インターネットのオークションでは、二束三文で取引されています。売りたくても、買う人がいないのです。骨董店は、品物をタダ同然で手に入れ、売り物に仕立て、買ってもらえそうな値を付け、買っていただけのが商売なのです。やみくもに高値で売りに出しても、買ってくれる人がいなければ商いにはなりません。テレビ番組のお宝鑑定団を見ていたのと実態との違いに、従兄弟は大変落胆していました。

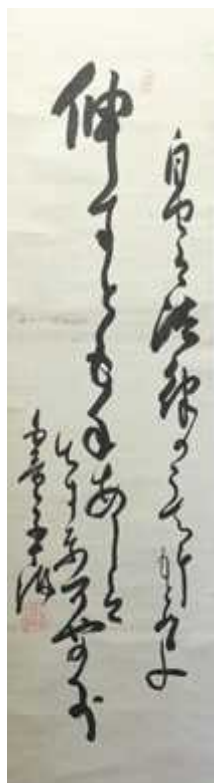
色々話をし、せめて遺産の内容を自分なりに調べるよう提案しましたが、そんなことはまったく考えられないようで、最後はただで良いので処分したいとのことでした。そこで、何時できるかわかりませんが、できるだけだけの整理、データ化を約束し、自分にはお荷物になりますが、預かることにしました。

掛け軸が二十点近くあり、その中に嵐牛に近い卓池、十湖の作品を見出しました。さすがに縁者だけあって、卓池、十湖についてはそれなりに理解していたようです。下段に写真を添付します。卓池の軸は卓池らしい「姫部志（女郎花）」の自画賛で素晴らしく、十湖の軸は十湖らしい雄勁な書風です。十一月十日に実物を鑑賞して下さい。

（嵐牛友の会・会長）

目次

- [1]書画・骨董といわれる物の実態
伊藤鋼一郎
- [2]柿園友垣抄(15)
一門人雪香宛書簡
加藤定彦
- [3]柿園社中の「書籍講」
倉島利仁
- [4]『柿園嵐牛俳諧資料集』ご案内
- [5]講読・鑑賞の会
今後の予定
- [6]柿園近影



自由は法律のうちにもとめよ
伸すとも手あしは出すなかやの外
白童子十湖



人のうへに
ながめられけり姫部志
卓池



柿園友垣抄(十五)——門人雪香宛書簡——

加藤 定彦

はじめに

伊藤家から出て来た嵐牛宛等書簡十七通の翻刻を『東海近世』第二十六号(平成三十年十二月)に掲載させて頂いた。ところが、最近また嵐牛書簡を含む門人雪香宛書簡百余通と俳書三、四十冊が市場に出、書簡すべてと俳書二十冊を入手出来た。今回は雪香と書簡の内訳について概略を述べる。

雪香兄弟の素性

書簡の宛名は雪香(俗名橋太郎)の外に空香(俗名平八)と連名のものであり、雪香の兄と判明する。混入する公文書の宛名秋野平左衛門は二人の父であろう。唯一の参考文献、紅林時次郎著『島田六合郷土史稿其ノ式』(昭和十年、私家版)を披見、その三六「○秋野平八／○秋野橋太郎」によって兄弟の素性がほぼ判った。

「平八」温厚にして博愛心強く、敬神嵩仏の念に厚かった。明治五年正月、島田宿副戸長となり、間もなく戸長となった。明治十一年十一月二日、畏くも、明治大帝御東幸の砌り、此の邸を在所に遊ばさる、光栄に浴した。

「橋太郎」俳人として知られ、雪香と号した。明治十九年十二月、島田銀行創立、自ら頭取と為り、金融、貯蓄の爲めに貢献した功績は蓋し大なるものがある。高德にして慈善に深く、世人「糞屋の旦那」と仰いだ。大正九年一月廿四日歿。年七十五歳。

島田の嚶々連

『柿園門人録』には「雪香秋野吉之丞(幼名) 駿河国志太郡島田宿慶応二年丙寅初冬」とあり、雪香(20歳)は、島田の砂白(秋野寛一郎)・習静(山本貞蔵)・春田(藁品熊治郎)・竹香(虎岩専蔵)・梅城(梅島彦兵衛)・友清(清水龍蔵)らといっしよに入門している。

故田中明氏旧蔵「月並句合」(高点丁摺の合本)六冊を拝借して調査したところ、島田地区関係の中に左の二点が混じっていて、入門頃の動きが判明する。

①「丙寅(慶応二年)春二月／柿園嵐牛翁評／重録奉鑑句抄／島田嚶々連」三丁

揮毫之部

花に寝ぬ心を打やよるの雨

シマダ 空香

軸

松原のある町中や春の月
提重のあきへ摘込土筆かな

嚶々連 柿園老樵
雪香

以下、一記・友清・空香の三名(句の部分に虫損)。

奥には「福又五・空香／禄五・三蕉雨／寿五・三雪香」と、勝者の点と名が記される。

②「三宗匠評／十巻奉録句合抜萃島田嚶々連」三丁

「前半」嵐牛評「千葉山観音祠奉額／雪月花古美雄四句合」(データは省略)

「後半」「ばせを忘冬季三句合」は(1)玉の屋瑩翁、(2)時雨窓卓道翁、(3)柿園嵐牛翁の三評。催主は嚶々連の雪香・習静・竹香・梅城・空香。巻末に「慶応丙寅暮冬刻于有嘉園／川光工(印)」の刻記があり、雪香の有嘉園に彫工を呼んで彫刻、摺らせたことが判明する。

駿河の地は早くから雪門の地盤で、『島田市史』(中巻)が地元を代表する俳人に挙げる森冬羅(天保十四年・一八四三没)も、五世雪中庵対山の『旦暮帖』(文政・天保期)に入集している。

駿府雪門の拠点時雨窓を継ぐ卓道は、慶応四年(一八六八)、雪中庵鳳洲に破門され、時雨窓を出る。しかし空外庵と別号を改めて活動を続け、明治六年(一八七三)には北番町の八雲神社内に養成学舎(後、成教舎と改称)と呼ぶ私塾を開校する。明治十三年の没。享年七十四。

玉の屋瑩は島田の対岸金谷の古老で、俗名住川藤蔵。嵐牛の一歳年下で、万延元年(一八六〇)頃から二人は親交を重ね、文政末から天保の初め頃まで、地元先輩たちの撰集や月並句合に参加した仲間である。

雪香ら嚶々連は句合を催すだけでは飽き足らず、嵐牛に入門して連句指導を親しく受け、付合文芸の真髄を味わいたかったのである。島田での指導の様子は、『柿園嵐牛資料集』に収録した「柿園日記」慶応三年二月と七月の記事を参照されたい。

入手した書簡の主要なものは、『東海近世』第二十七号に翻刻・掲載予定なので内容紹介は省略し、主要発信者名のみを五十音順に挙げる。

羽洲(八通)、蝸堂、湖山(小野氏)、而后(嵐牛宛)、習静、十湖、春湖、尋香、
醉雨(二通)、水音、青溪(二通)、静処、霜涯、卓道(二通)、杜水、梅裡、はじめ、物
外、蓬宇(四通)、瑩、黠池(嵐牛宛)、木甫、木和、嵐牛(二一通)、犁春(六通)、
流翠、良大(二通、妻香畦一通)

なお、*を付した人物は漢詩人。*を付した物外は島田を代表する漢詩人桑原苳堂の妻で、国学・和歌は依平門、俳諧は嵐牛門。霜涯は二人の長子である。

(嵐牛友の会・顧問)

柿園社中の「書籍講」

倉島利仁

前号の伊藤館長の文章で、洋々宛書簡の整理を進めている旨のご報告があったが、その中に興味深い資料を見いだしたので報告したい。

全四丁の横長の仮綴じ本で、表紙には「慶応紀元丑仲秋発／書籍講人名録」とある。慶応元年（一八六五）八月に発起された「書籍講」の名簿である。表紙には代表として「柿園裡知碩／為舟／貫一」の名が記されている。

「講」は「金の融通や貯蓄などの目的で組織した一種の相互扶助の団体」（日本国語大辞典）であり、「書籍講」とは書籍を購入するためにお金を出し合ったメンバーということだろう。現在嵐牛俳諧資料館には俳諧関係の版本が三百点程残され、その内の約百点は嵐牛が俳諧を志した文政以前の蕉門俳書のコレクションであり、そのような膨大な蔵書をどのように収集したのかは明らかでなかったが、書籍収集の方法の一つを知ることができた。

表紙をめくると、「定／一金百匹 壺口」「落札之儀者其下故実にして、連衆之金高に應じ落札之書物相渡し可申事。」とある。出資金は一口を金百匹とし、出資したメンバーは購入した書籍を自由に閲覧できるとしたのだろう。ちなみに、金百匹は金一分（銭一貫、一十文）で、一両の四分の一にあたる。金一両の価値はおよそ現在の七万五千元ほどで、金百匹は一万九千円ほどである。

「人名録」には右に続いて以下の文章がある。

右者、友雀の仲よく群がり遊ぶといへども、いつたすゞめのはる／＼立別れんもおぼつかなければ、其折から祥不祥の声をあげざる為なり。会は年に一度と定められたれど、苗代水もほどよりのり、花の色もつや／＼しく、秋の長穂の実入よからむ折は、勸学院ならねば蒙求にあらぬひなびごと集り轉り合て、二会三会にもおよびなば、会主のよろこびは例の百までをどりをわすれじといふ。

初めは年に一度と定めながらも、次第に回を重ねた会では、もちろん俳諧の話題で盛り上がり、会主の嵐牛を喜ばせたのだろう。文章中にある「勸学院」は「平安京左京三条の北側にあった藤原氏の教育機関」（日本国語大辞典）で、「勸学院の雀は蒙求を轉る」は、聞き慣れたことは自然に覚える意のことわざ。「雀百まで踊り忘れぬ」も、若い時からの習慣は、年老いてもなおならないということわざである。

二丁表より三丁表には、為舟、貫一、知碩、雨好、素源、岳丈、岱仲、晴笠、春谷、ふじ満、雨竹、弄我、旦雅、送雨の十四名が名を連ね、各一口を出資している。

ところで、この冊子には一枚の書き付けが添えられており、そこには以下の書名が記されている。

歴代滑稽伝、俳諧新歌仙、五色墨、鞞随筆、芭蕉発句評林、桐一葉、俳諧獅子

物狂、三疋猿、其角十七条、春の日、朱むらさき、続みなしぐり、長明方丈の記、玄峰集、三日月日記

これらの内、『獅子物狂』『方丈記』以外は現存が確認できること、「俳諧新歌仙」は、書題簽に「俳諧新歌仙」とある当館所蔵の『新山家』を指すと考えられることから、これらの本は「書籍講」によって購入したと考えられる。

さらに、書物購入に関すると思われる文書は他にも三点ほど見つかった。

①十一月八日付、柿園高師宛其常覚之書き及び書簡
はじめに「おぼへ」として九点の書名と値段を記し、続けて十三点の書名と合計金額を記している。続く手紙部分には、これらを知碩の所へ届ける旨も記されている。「書籍講」に添付された書き付けの書名が全てここに見られるところから、両者に密接な関連があることは間違いない。冒頭の九冊の中には「〇有」と朱書きがあるものもあり、このリストから購入する本を選んだ結果が先の書き付けなのだろう。

差出人の其常は、入門時に提出した名簿（みようぶ）がわりの短冊によれば、山名郡鳥羽野村（現袋井市富里）の溝口時三郎で、安政七年正月に入門している。柴田静夫『浅羽我が郷土の今昔』によれば、溝口家は『へいへもさま』と呼ばれる旧家で、其常は十一代目。息子健次郎（俳号可雄）も俳諧をよくし、明治三十四年の知碩没後は南遠俳壇の中心となった。溝口家の家業などは明らかでないが、裕福な家だったことは想像に難くない。

②正月十一日付、柿園高師宛其常覚之書き

「八月分」及び「十一月分」として五点ずつの書名とそれぞれの値段を示した後、「此たび」として二十六点の俳書と値段を挙げている。これらの内十三点は当館所蔵が確認でき、やはり書籍購入に関するものだろう。三十六点の書籍の合計金額は「銀二百四拾三匁式分」で、「金四両五朱」余りとある。

また、差出人は「江戸屋敷にて／溝口其常」とある。其常は江戸にも住んで本屋との繋がりを持ち、定期的に本を仕入れ、必要に応じて嵐牛たちが購入できるように便宜を図っていたのだろう。

③五月十一日付、溝口様宛作卯覚之書き

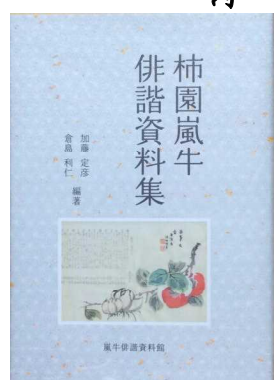
「覚」として十九点の俳書と値段を記したものの。このうち、当館所蔵が確認できるのは十二点ある。②と共通する俳書が四点あるものの、直接関連あるか分からない。差出人も不詳ながら、おそらく江戸の本屋が其常に示したリストであり、ここから其常が嵐牛たちが選書して購入したのだろう。

④⑤は「書籍講」とは直接関係ないかもしれないが、知碩や其常を介して書籍をまとめ買いたし様子が見られる。当館所蔵の書籍は嵐牛個人や伊藤家代々が購入したものばかりではなく、門弟たちと共同購入したものも含め、柿園社中の財産として管理されたのだろう。

（嵐牛友の会・幹事補佐）

『柿園嵐牛俳諧資料集』ご案内

購入希望の方は、嵐牛友の会会長
伊藤鋼一郎までご連絡ください。
頒布価格は一部五〇〇〇円です。



講読・鑑賞の会 今後の予定

第二十回 十一月十日(日)

会場 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 柿園社中「書籍講」ほか紹介
嵐牛門人短冊講読
石川依平「宇津の山越」講読

第二十一回 五月十七日(日)

会場 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 加藤定彦先生講話
石川依平「宇津の山越」講読 ほか

※ 友の会に対するご要望などをお聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと
がありましたらご投稿ください。



百年の歳を経て 未だ首を垂れる 柿園の柿

今年は 何時になく生り年です

令和元年十月二十一日 撮影 事務局 伊藤英子